バウハウス2代目校長ハンネス・マイヤー設計によるベルリン郊外ベルナウの「同盟研修学校(Bundesschule Bernau)」

お茶の水女子大学名誉教授　田中 辰明

はじめに

バウハウスは今年2019年に創立100周年を迎える。バウハウスの初代校長はヴァルター・グロピウス(1883～1969)で、3代目校長はミース・ファン・デル・ローエ(1886～1969)である。では間に入る2代目校長は誰かというと、ご存知の方はあまり多くないだろう。2代目校長はハンネス・マイヤー(1889～1981)である。

ヴァルター・グロピウスとミース・ファン・デル・ローエはあまりにも高名な建築家であるので、ハンネス・マイヤーの影が薄くなるのも致し方ない。バウハウスはグロピウスの設立マニュフェストに次のように述べられている。「バウハウスはあらゆる芸術的創造を統合することをめざし、あらゆる工芸部門をひとつの新しい建築というものに、その建築の不可分な構成要素として総合していくことをめざす。バウハウスの究極の目的とは、たとえばそれがはるかな目標であろうと、ひとつの統合芸術、すなわちモニュメンタルな芸術とデコラティブな芸術のあいだにまったく境界が存在しない一つの偉大な建築である」。バウハウスの究極の目的は芸術的創造を統合して建築を作る事であった。バウハウスの実績として素晴らしい絵画を残したパウル・クレー、ヴァシリー・カンディンスキー、オスカー・シュレンマー、ライオネル・ファイニンガー、ヨーゼフ・アルバースらの業績は高く評価される。また芸術教育に力を入れたヨハネス・イッテンの業績もよく認められている。ラスロ・モホリ＝ナギのグラフィックデザイン、写真、マリアンネ・ブラントの金属加工、グンタ・シュテルツルの織物も評価が高い。ではグロピウスが究極の目的とした建築はどうか？知られる作品はベルリンのヴァルター・グロピウス、アドルフ・マイヤー作のゾンマーフェルト邸があるが、第二次世界大戦で焼失している。ヴァイマールに残る、ゲオルグ・ムッヘ、アドルフ・マイヤーの「アム・ホルンのモデル住宅」、グロピウスによるデッサウのバウハウス館、マイスター宿舎、デッサウ・テルテンの住宅団地、カール・フィガーによるコルンハウス、そしてハンネス・マイヤーのベルナウの同盟研修学校くらいである。究極の目的が建築であったにしては作品数は多くない。

建築を目指して基礎となる絵画、彫刻に力を入れているうちに、台頭してきたナチスに押し倒されてしまったというのが実情であろう。バウハウスはドイツでは押し倒されたが、ミース・ファン・デル・ローエはシカゴへ亡命し、現在のイリノイ工科大学建築学部長に就任する。ヴァルター・グロピウスも米国亡命後ハーバード大学で建築学科教授として活躍した。そしてバウハウスのマイスターであったマルセル・ブロイヤーと共に事務所を立ち上げ、建築家として超高層建築を作り、成功した。カンディンスキーはパリで、パウル・クレーはスイスのベルンで画家として活躍した。バウハウス時代は個性のある芸術家の集団であったが、それぞれ世界へ飛び、バウハウスの精神を世界に広めた。我が国にも吉田鐵郎による東京中央郵便局などバウハウスの影響を受けた建物が残る。バウハウスに学んだ山脇巌は帰国後日本大学芸術学部の創設に参加した。ヨハネス・イッテンは自らの芸術学校をベルリンに作り、そこで学んだ山室光子、今井(笹川)和子らは自由学園工芸研究所を立ち上げた。

1．バウハウス2代目校長 ハンネス・マイヤー

スイスのバーセルで1889年に生を受けている。父親も建築家でエミール・マイヤー・リザと言った。バーゼルはスイスの3つ目に大きな都市で、ドイツ語、イタリア語、フランス語が話され、国際都市であった。この事がハンネス・マイヤーが後に国際的に活躍することに影響する。

1905年に左官の技術を学び、その後建設の会社に勤務、さらにバーセルの工芸学校(Kunstgewerbeschule)で学習した。1909年から1912年までアルバート・フレー

リッヒ(Albert Froelich)の建築設計事務所さらにベルリンのエミール・シャウト(Emil Schaudt)の事務所に勤務した。1912年から1913年にかけて英国に留学している。帰国後1916年にはゲオルク・メッテンドルフ(Georg Metyendorf)のミュンヘン・アトリエ(Münchener Atelier)の事務所責任者になっている。さらに1918年までエッセンの大鉄鋼所クルップ社の建設部管理部長を務めた。1919年から故郷バーゼルで建築家として自立し、1924年にかけバーゼル近郊のフライドルフ(Freidorf)に住宅団地(ジードルング"Siedlung")を建設した。1924年にはベルギーに滞在している。1926年にハンス・ヴィトヴァー(Hans Wittwer)と共に建築事務所を設立。そしてヴィトヴァーと共にバーゼルのペータース学校(Petersschule)を1926年に設計し、さらに1926年から27年にかけて国際連盟の本部を設計している。

1927年4月にグロピウスから招聘を受けデッサウのバウハウス建築部のマイスターに就任。1928年3月にはグロピウスの後任としてバウハウス校長に就任した。その時にかって共同で建築設計事務所を開設したヴィトヴァーをバウハウスに招へいしている。ヴィトヴァーと共にベルリンの北部郊外にあるベルナウ(Bernau)に全ドイツ労働組合総同盟の研修学校を1928年から1930年の間に建設した。マイヤーはバウハウス校長として綿密な教育プログラムを作成し、建築教育に力を入れた。しかし学生の中に共産主義者がおり、バウハウス内部でその勢力を伸ばすようになった。マイヤー自身も共産主義者であったことからデッサウ市と摩擦が生じるようになった。当時のバウハウスはデッサウ市立であったことから右翼系の新聞はデッサウの税金がバウハウスを通じて共産党に流れていると書き立てた。そのような政治的理由でマイヤーは1930年に解任され、モスクワの建築学校であるWASI大学の招聘を受けモスクワへ移住する。

1934年から建築アカデミーの住宅局長を務めている。1936年から1939年までスイスでミューリシヴィル(Mümliswil)の保育園を設計している。1939年から1949年までメキシコに渡り、建築家、都市計画家として活躍した。出版社の社長も務めた。1949年スイスに帰国し1954年にルガーノ郊外のクロチフィッソ・デイ・サヴォサ(Crocifisso di Savosa／Lugano)という小さな村で死去した。マイヤーは1920年代の最も優れた機能主義者の一人に数えられている。

2．ベルナウの全ドイツ労働組合総同盟の研修学校(同盟研修学校)

筆者は幸いにも2018年12月16日にこの学校をベルリンの建築家ヴィンフリード・ブレンネ[1)]さん(写真1)にご案内頂いた。この同盟研修学校はブレンネさんの事務所により、修復されたもので、直接ご説明頂くのは大変な光栄であった。学校の敷地に入ると「ハンネス・マイヤーのキャンパス」という標識が建っていた(写真2)。

写真1　建物の修復を行った建築家ヴィンフリード・ブレンネさん

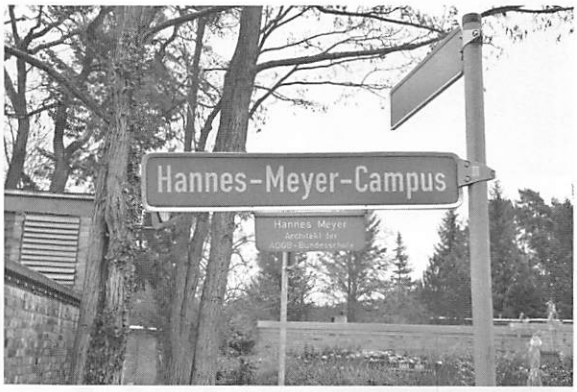

写真2　建物の場所を案内する標識

校舎の外壁には、案内をして下さっているブレンネさんの事務所が2008年に世界の歴史的建築物の改修で優れた業績が認められ大賞を受賞した際の、記念のプレートが貼られていた(写真3)。また欧州連合(EU)の記念建築物保全機構から助成金が出たこと、建物のあるブランデンブルグ州から助成金、さらにドイツの建築物保全協会からも助成金が出たということを記したプレートが貼られていた(写真4)。また玄関には建築家マイヤーとヴィトゥヴァーの作品である事を表示していた(写真5)。

写真3　ブレンネ建築設計事務所が世界の有名建築を改修したとして授けられた大賞のプレート

写真4　記念建築物の保全、改修に助成金を出した協会名を記した銘板

写真5　建築家マイヤーとヴィトゥヴァーの作品であることが建物玄関に表示されている

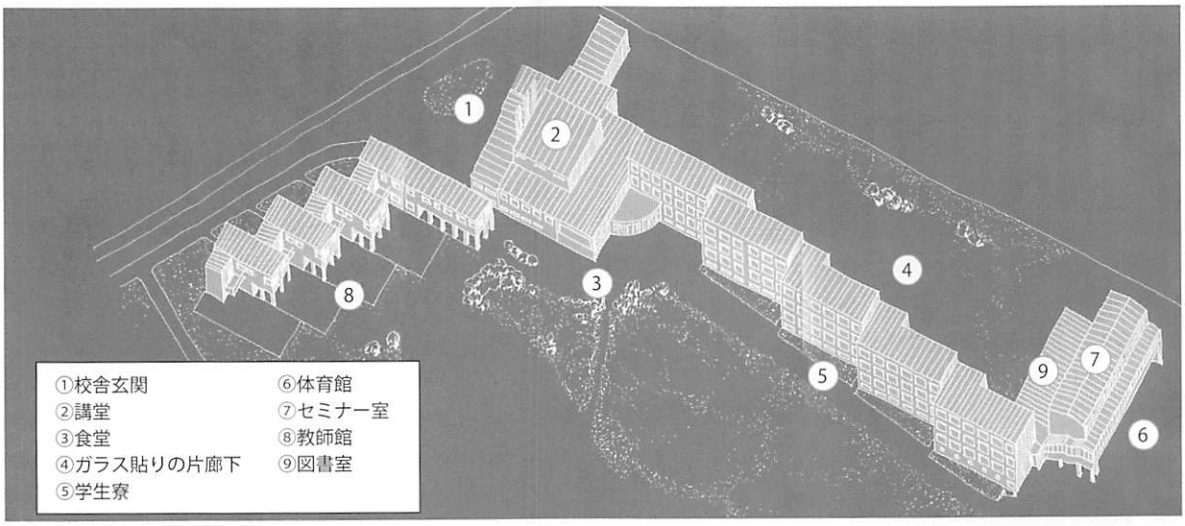

図1　同盟研修学校配置図

写真6　建物玄関から見た内部のホール

写真7　最大で250人を収容する講堂

写真8　講堂の外壁窓（高い部分に窓を設け採光の効率を上げた

写真9　建物内部から見た玄関

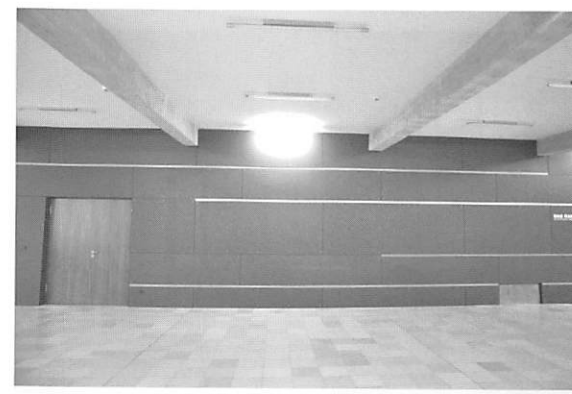

写真10　横方向に緑、黄、赤、青の線を入れバウハウスの色彩を彷彿させる

1919年にヴァイマールで発足したバウハウスはモダニズムの原点であった。良いプロポーション、実用的で簡素な事、手工業と芸術の統合を主張し、この結晶がベルナウの地に完成した。校舎は緩い傾斜地に建設されている。

配置図を図1に示す。グロピウスがデッサウに建設したバウハウスの校舎や教師館のような矩形建築ではなく、建築のマスが互いに組み合わされ、そして貫通しあっている。校舎はなだらかな傾斜地を這っているように建っている。一部は宙に浮かんでいる。部分と部分が張り合い、建築の形態の妙を表現している。

建物の玄関から室内の広いホールを見渡すと(写真6)、見学日は日曜で学生は不在であったが、ここに学生が群れているであろう様子がうかがわれる。ホールに沿って講堂がある(写真7)。最大で250人を収容できる。講堂の外壁には上部に採光用のガラス窓が設置されていた(写真8)。採光を良くするには十分な面積の窓を設置すれば良いが、ベルナウは寒地である。事実見学の日も時折小雪が舞っていた。大きな窓ガラスは熱の損失が大きくなる。そこで窓面積は小さくし、採光の効率を上げるために外壁の上部に設置したのである。室内のホールから玄関方向の外部を見た様子を写真9に示す。外部から直接ホールに入るのでなく、玄関を入ったところが風よけ室になっている事が分かる。ホールと講堂を仕切る壁は緑、黄、赤、青の横線が入っており、バウハウスの色彩を彷彿させる(写真10)。建物内には建築家マイヤー、

写真 11　建築家マイヤー、ヴィットヴァーの業績を紹介するポスター

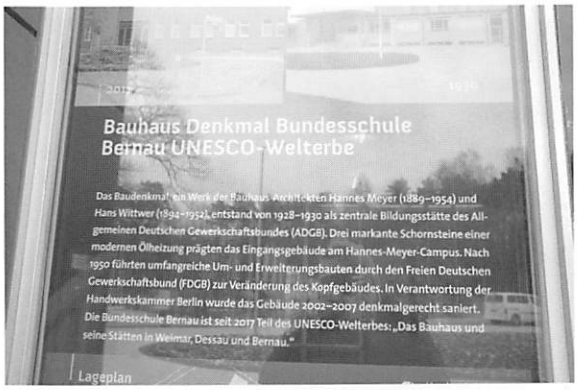

写真 12　建物のガラスにはバウハウスの社会記念建築物としての建物由来が記されている

写真 13　建物に組み込まれた 1928 年 7 月 29 日と銘じた礎石

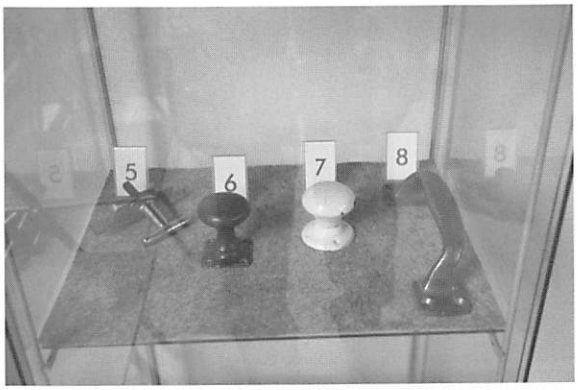

写真 14　改修で取り外された金具類の展示

写真 15　建物の廊下から中庭の眺め

写真 16　廊下の外壁に設置されたガラスブロック（上部は透明ガラスを設置し、採光の効率を上げた）

ヴィットヴァーの業績を紹介するポスターも掲示されていた（写真11）。また建物内のガラスには「バウハウスの社会記念建築物としての建物由来が記されていた（写真12）。建物には1928年7月29日と記した建設当時の礎石が取り込まれていた（写真13）。また修復時に取り外した金具類も展示されていた（写真14）。このようなきめの細かい配慮も有名建築物の修復保全を長年にわたってやって来られた建築家ブレンネさんの巧妙で熟練のわざである。

建物の廊下からの中庭の眺めを写真15に示す。ブルーノ・タウトが1914年のケルンで開催されたドイツヴェルクブンドの展覧会に「ガラスの家」を出展し、名声を得た。その時にガラスブロックが使用され、それ以来先進的な建築家はガラスブロックを使用するようになった。

写真 17　食堂

写真 18　建物に設置された片廊下(ガラス張りにして廊下を付設温室とした)

写真 19　室内側に設置された放熱器

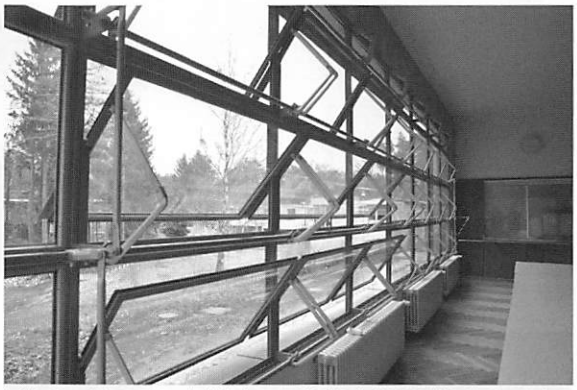

写真 20　ガラス窓の自然換気用に設けられた開閉装置(デッサウのバウハウスの建物グロピウス設計)にも同様の装置がある

ここでも廊下の外壁にガラスブロックが使用されている部分がある(写真16)。採光の効率を上げるために、ガラスブロックの上部には透明ガラスを設置している。

講堂に隣接して食堂がある。見学日は日曜であったので、椅子などはテーブルの上にかたずけられていた(写真17)。建物に沿って片廊下がある(写真18)。この廊下は地形に従い傾斜している。外気に面してはガラスがはめ込まれているので、廊下部分は付設温室になる。廊下の屋根は鉄骨によって支えられている。廊下は冬季の寒さに配慮して放熱器も設けられている(写真19)。この放熱器は本来外壁側の窓の下に設置されるべきである。そうでないとコールドドラフトが生じる。もっとも現在では窓の断熱性能が以前に比べて飛躍的に向上したので、このような室内側に放熱器を設置することがある。古い記録を見ると、改修前もこの位置に放熱器が設置されていた。ここは廊下であるので少々のコールドドラフトが生じても問題にならなかったのであろう。ガラス窓の上部には自然換気用に窓の開閉装置が設置されている(写真20)。手動によるものであるが、これはグロピウスがデッサウのバウハウス校舎に採用した開閉装置と酷似している。

写真21に外部から見たセミナー室を示す。セミナー室の内部を写真22に示す。全面ガラス張りである。この建物の建設年が1928年であるから当時としては画期的な試みであった。但し当時のガラスは断熱性能が劣っていたので、下部に放熱器を設置して冬季のコールドドラフトを防止している。緩やかな傾斜を持つ片廊下は外部からも廊下に入れるようにいくつかの透明ガラスによる扉が設けられている(写真23)。この扉では中央の位置に着色ガラスが採用されている。その扉を開けて廊下に入ると、その前の学生寮への入り口扉には同じ色のガラスが採用されている。緑の扉を開けて廊下に入ると緑色に着色した扉の学生寮に入ることができるという仕掛けである。学生寮は3階建であるので、階段がある。階段を写真24に示す。学生寮の寮室を写真25に示す。室内にはベッドと、勉強机がある簡素な仕様である。

写真 21　外部から見たセミナー室

写真 22　セミナー室内部

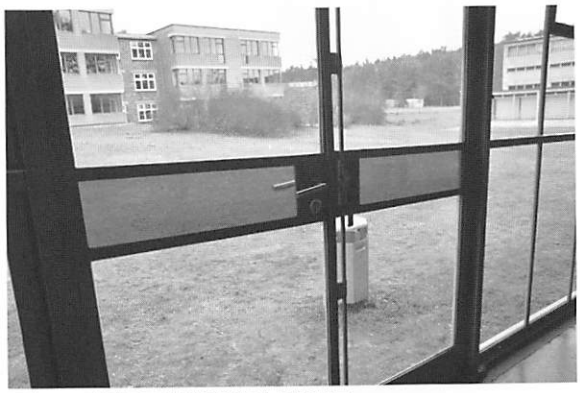

写真 23　片廊下の敷設温室に入る外部扉

写真 24　学生寮階段

写真 25　学生寮室内

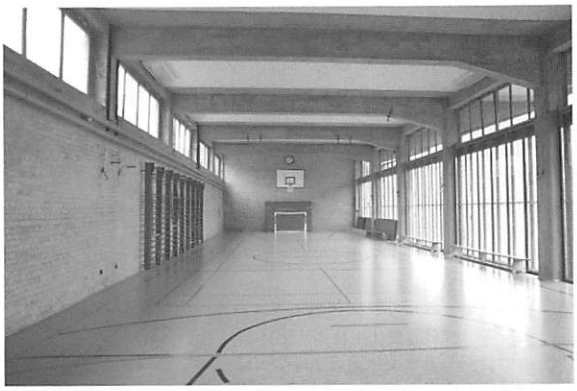
写真 26　体育館

写真 27　図書室へ至る階段

写真 28　図書室

写真 29　傾斜地の建設された校舎

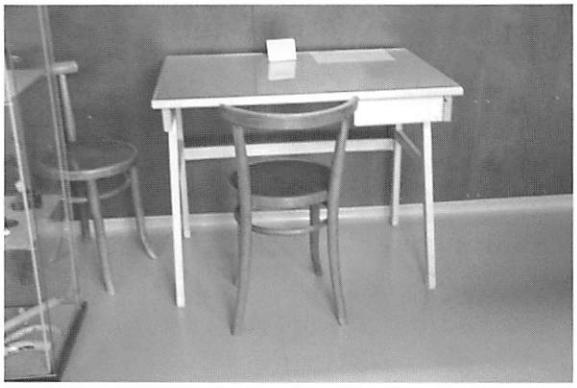
写真 30　学生寮で使用された机と椅子

写真 31　6棟の教員宿舎

この建物には室内の体育館が付属している。その内部を写真26に示す。バウハウでは体育にも力を入れていた。芸術の指導者には体力も大切であることを考慮し、教育カリキュラムに取り入れられていた。体育館にはバスケットボール練習場が一面とられていた。また壁に沿って昔日本の小学校体育室にもよくあった体育用の梯子が設けられていた。これは助木(ろくぼく)と呼ばれた。ドイツではこの梯子がスエーデン体操に重要な役割を果たすことから、スエーデン梯子と呼んでいる。図書室には階段を上がっていく。その階段を写真27に示す。図書室内部を写真28に示す。

建物は緩やかな勾配のある土地に建設されている。外部から見た様子を写真29に示す。学生寮で使用されていた机と椅子が展示されていた(写真30)。この机はヴェラ・マイヤー・ヴァルデック(Vera Meyer－Waldeck)の作品である。使用しやすいように僅かな勾配が設けられ

ている。眩しさを防ぐために机の表面は黒色のリノリウムが張られている。机の右に引き出しがあるが、これはA－4サイズのノートや紙が収まる大きさになっている。このような規格も当時のバウハウスが普及を図ったものである。この照明器具もバウハウスが開発したものである。椅子は当時の会社トーネット(Thonet)が供給していたものである。

校舎と少し離れて教員宿舎棟がある(写真31)。2階建てでこの写真の反対側はピロティーがある。全部で6棟である。この校舎は緩やかな傾斜地に立っていることはすでに述べた。この一番低い場所に屋外水泳プールがある。

おわりに

バウハウス2代目校長ハンネス・マイヤーの代表作を紹介した。まさにバウハウス調の建築で感心した。しかしこの作品を含めてハンネス・マイヤーは日本では有名ではない。建築史の授業でも触れられていないであろう。このことに関しベルリンのバウハウス記念館の学芸員を長く勤め、大学教授になったマグダレーナ・ドロステ(Prof. Mgdalena Droste)さん(写真32)は筆者に「グロピウスがハンネス・マイヤーをバウハウスに招き、校長にしておきながら、後で、不仲になった事をあげていた。その結果バウハウスからマイヤーの記録などが処分されてしまった事による」との事であった。この事は文献10の166～167ページにも記述されている。事実グロピウスには他の建築家に対する評価を書いた文章が残っているが、ハンネス・マイヤーに関する記述はない。いつの世でも社会の中でうまく生きていくのに人間関係を良好に保つことは極めて重要である。

写真32　ドロステ教授と筆者(ベルリンのドロステ教授宅、2015年3月)

〈参考文献〉

1．田中辰明:「ブルーノ・タウト、日本美の再発見をした建築家」(中公新書2169)
2．田中辰明：「ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会」、東海大学出版会
3．田中辰明：バウハウス(ヴァイマール時代)月刊建築仕上技術 2014年8月号
4．田中辰明：バウハウス(デッサウ)月刊建築仕上技術　2014年9月号
5．田中辰明：バウハウス(ベルリン)月刊建築仕上技術　2014年10月号
6．田中辰明：ベルリンに残るナチス好みの建築とナチスドイツへの反省、月刊建築仕上技術　2014年11月号
7．田中辰明：世界文化遺産アルフェルトのファーグス工場、月刊建築仕上技術　2014年2月号
8．田中辰明：シンポジウム「知られざるバウハウス」開催バウハウス100周年プレイベント、月刊建築仕上技術　2017年12月号
9．田中辰明：バウハウス100年、第一回　知られざるバウハウス、コア東京2018年11月号
10. Magdalena Droste"Bauhaus"Taschen
11. Hans M. Wingler,"Das Bauhaus"Dumont
12. Frank Whitford "Bauhaus"Thames & Hudson world of art
13. Ute Ackermann, Ulrike Bestgen, "Das Bauhaus kommt aus Weimar"
14. Jeannine Fiedler, Peter Feierabend"Bauhaus"h. f. ullmann publishing GmbH
15. Beiträge zur Bau und Nutzungsgeschichte Heft 7 Dezember 2013"als bauhäusler sind wir suchende"Hannes Meyer(1889-1954) Beiträge zu seinem Leben und Wirken
16. Klaus－Jürgen Winkler,"Der Architekt hannen meyer Anschauungen und Werk"VEB Verlag für Bauwesen Berlin
17. Beiträge zur Bau und Nutzungsgeschichte Heft 8 Mai 2015, "Bewahren－Sanieren－Nutzen"Bauhaus Denkmao Bundesschule Bernau bei Berlin

〈註〉

1．ヴィンフリード・ブレンネ(Winfried Brenne)：ベルリンの建築家、ベルリン市シュテーグリッツ(Steglitz)に設計事務所を持つ。シュテーグリッツはバウハウスのベルリン校があった場所でもある。バウハウス関係、ブルーノ・タウト関係の建築物の補修と保全に尽力した。ブルーノ・タウトに関する著書もある。2008年にブルーノ・タウトが設計した住宅団地(ジードルング)4件を含む6件のベルリンのジードルングがユネスコの世界文化遺産に登録されたが、登録の為の申請書を作成した立役者である。